

文化情報資源としての留学生生活用の実際

— 「MEC と留学生による読み聞かせコラボレーション」を中心に—

篠崎 大司

0. はじめに

本稿は、2006年6月17日に行われた「Mutsuko's English Club と留学生による読み聞かせコラボレーション」（以下、本交流会）の活動を概観するとともに、交流会に至るまでの経緯や参加者から得られたアンケート結果などから、地域社会における文化情報資源としての留学生生活用の意義や今後の展開について考察するものである。

筆者が勤める別府大学（以下、本学）では、大学院・大学・短期大学部全体で毎年100名以上の留学生を受け入れている。本学に在籍する留学生数は、2007年2月1日現在で13の国と地域から538名にのぼり、全学生数の15%を占めている⁽¹⁾。そのような状況から、本学では2001年度より本学内に日本語課程を設置し、留学生に対する集中的日本語教育プログラムを実施してきた。本学に入学した留学生はまずこの日本語課程で週15コマの日本語プログラムを半年から1年半受講し⁽²⁾、その後、各学科へ進むのである。

しかし、このようなプログラムに代表される留学生への教育的な配慮が、一方で地域社会や日本人との接触の機会を留学生から相当程度奪っているのもまた事実である。このことは、目標言語社会に身を投じる「留学」という行為が必ずしも十分に発揮されていないことを意味するだけでなく、地域社会にとっても有効な人材としての留学生を活用しにくい環境にもなっている。

こうしたことから、筆者は平成17年度前期より留学生科目「応用日本語ⅡA・B」において、留学生と地域社会や日本人との文化交流の促進を目指した「留学生による自作紙芝居読み聞かせ活動」（以下、本授業）を実践してきた。

中でも Mutsuko's English Club (梶谷睦子氏主宰。以下、MEC) とは、これまで3度の交流会を行ってきており(2007年2月時点)、一定の成果を挙げている。

本稿では、そのうち2度目の交流会について報告するものであり、あわせて今後の方向性について考察するものである。

1. 本授業の概要

1-1. 授業の枠組み

①科目名：応用日本語ⅡA・B(2006年度前期)

②受講生：日本語課程に在籍する国文学科留学生1・2年生11名。

うち中国人9名、韓国人2名。

③授業の内容：

授業は週1回。原稿作成→原稿の推敲→原稿の割り振りと下絵作成→紙芝居作成→プレゼン練習→リハーサル→本番、という流れで指導を行った。

なお、原稿の割り振りと下絵作成及び紙芝居作成では芸術文化学科の学生に協力してもらった。また、プレゼン練習では、国文学科の学生に発音指導者として参加してもらった。ただし、プレゼン練習については十分な人数が確保できず徹底した指導はできなかった。

1-2. 授業のねらい

篠崎(2006)では、本授業のねらいとして①日本人との相互交流、②文化情報資源としての留学生の位置づけ、③留学生の日本語力と学習動機の向上、④日本事情教育としての日本理解と自文化理解、の4点を掲げた(pp.158-159)。本交流会では、これらの枠組みにおいて、以下の観点でねらいを設定し活動を行った。

①日本人との相互交流

本授業では、紙芝居の読み聞かせやその後の遊びを通じて幼稚園児との継

続的な交流を行ってきたが、学外の児童・生徒との交流はほとんど行うことができなかった。そこで、本交流会では MEC で英語を学ぶ園児から高校生およびその父兄と交流する機会を設け、さらなる交流を図った。

②文化情報資源としての留学生の位置づけ

筆者は、篠崎（2006）において、文化を「生活を豊かにする情報の束」と位置づけた上で、自国文化を日本人に提供する情報提供者として留学生を位置づけた（p.158）。

本交流会においても基本的な位置づけに変わりはなく、これまで同様、彼らが提供する紙芝居が自国の文化情報となる。それによって、昔話に表される各国らしさ、そして昔話の底流にある普遍性を参加者に感じてもらうのがねらいである。

③留学生の日本語力と学習動機の向上

本授業では、受講生が普段受講している日本語の授業とは異なる、日本人との交流に主眼を置いた授業を展開することにより、日本語力と学習動機の向上を期待した。

具体的には「園児が分かる日本語力の養成」という、極めて現実的な目標を掲げて受講生の日本語指導に努めた。日本語力の向上に関する指導としては、園児が理解しやすい語彙の選択、親しみやすい文体による文章構成、発音矯正、プレゼン技術等である。また、学習動機を高める環境作りとして、生の日本語に触れること、日本人から瞬時にフィードバックがあること等があげられる。

④日本事情教育としての日本理解と自文化理解

通常授業で行なわれる日本事情教育は、教室内での活動という制限から擬似的なものにならざるを得ず、ややもすると机上の理解に止まってしまう傾向がある（篠崎（2006） p.159）。

そこで、本授業では、幼稚園訪問を通して、日本の幼児教育の現場がどの

ように行なわれているのかについて学ぶ場を、さらに本交流会を通して、日本人児童やその父兄が、留学生の出身国や国際理解にどの程度関心を持っているのか肌で感じることができる場を提供した。

また、自国の昔話の紙芝居を作ることによって、その話に込められた自国の価値観や世界観を再認識したり理解を深めたりする機会を提供した。

2. 本交流会報告

2-1. 経緯

活動開始当初は、学内にある付属幼稚園で読み聞かせを行い、その様子を筆者のホームページ⁽³⁾で紹介していた。それがマスコミで取り上げられるようになったのがきっかけとなって、梶谷氏からの誘いを受け、2005年11月6日(日)宇佐市にて交流会に参加することとなった⁽⁴⁾。

その後、両者のやり取りの中で前期は筆者主催、後期は梶谷氏主催で交流会を行うこととなり今回の実施に至った。

2-2. 概要

交流会名称：Mutsuko's English Club と留学生による読み聞かせコラボレーション

日 時：2006年6月17日(土)

場 所：別府市コミュニティーセンター

対 象：特に制限は設けなかったが、会の内容は読み聞かせに強い興味を持つと思われる2歳児から小学1年生程度にあわせて設定した。

参加人数：

70名程度(うち「応用日本語Ⅱ」を受講している留学生は10名。)

プログラム：

一、あいさつ

一、第一部 留学生による紙芝居と国の紹介

韓国を作ったものがたり(韓国)

とうかくさんとおおかみ(中国)

お日さまとお月さま (韓国)

(休憩 おやつタイム)

一、みんなで歌おうー「あたま・かた・ひざ」ー

一、第二部 Mutsuko's English Club による Story Telling

From Head to Toe

Yo ! Yes !

The Hungry Caterpillar

I like Me

一、「雨ニモマケズ」ー読み聞かせコラボ

2-3. 内容

筆者によるあいさつの後、「第一部 留学生による紙しばいと国の紹介」として、以下の昔話の読み聞かせが簡単な国の紹介も交えて行われた (写真1)。なお、() 内はその昔話の出典国を表す。

(1) 韓国を作ったものがたり (韓国)

(2) とうかくさんとおおかみ (中国)

(3) お日さまとお月さま (韓国)

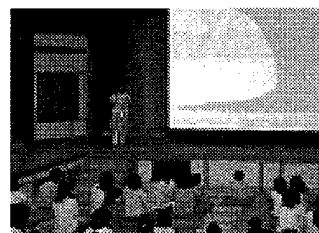


写真1

本交流会の主な対象が低年齢児であることから、読み聞かせだけでは途中で飽きることが予想された。そこで10分間の休憩の後、「みんなで歌おうー『あたま・かた・ひざ』ー」と題して、体を使った活動を行った。これは、英語の童謡である "Head, Shoulders, Knees and Toes" を日本語にアレンジしたもので、歌を歌いながら体の各箇所を触っていくものである。

始めは日本語で行い、徐々にテンポを早めながら中国語バージョン、韓国語バージョンでの活動を行った。日本人の参加者は中央の机敷席で行い、それを取り囲むように、留学生が一段高い位置でモデルを示しながら行った (写真2)。



写真2

続く第二部は「Mutsuko's English Club による Story Telling」として、MECに通う幼稚園児から高

校生による英語の絵本の読み聞かせが、振り付けも交えて行われた（写真3）。発表された story は以下の4作品である。

- (1) From Head to Toe
- (2) Yo ! Yes !
- (3) The Hungry Caterpillar
- (4) I Like Me

最後に「『雨ニモマケズ』－読み聞かせコラボ」として、宮沢賢治の代表作「雨ニモマケズ」を、留学生は日本語で、日本人児童・生徒は英語で一節ずつ交互に朗読した（写真4）。また、背後のスクリーンには、本活動を広く参加者に知ってもらおう意図も含め、本交流会の準備の様子を詩の一節ごとに映し出した（写真5）。

なお、本交流会開始直前と終了直後に、参加者に対して、アンケートに協力してもらうようアナウンスした。

本交流会終了後、会場にて MEC に通う児童及びその父兄、そして先の留学生 10 名での昼食会が行われた。

3. アンケート結果

アンケート回答者 34 名、うち有効回答数は 31 であった。以下、質問項目ごとに述べる。



写真3



写真4



雨ニモマケズ
I will not give in to the rain.

写真5

Q 1. なんさいですか。また、あてはまるものに○を書いてください。

年齢については、無回答が多かったため今回は対象外とした。

	男	女	計
幼稚園・保育園	0	2	2
小学	1	9	10
中学	2	4	6
高校	0	3	3
大学	2	0	2
社会人	2	6	8

結果からは「小学」の参加が10名と最も多く、ついで「社会人」8名と続いている。「幼稚園・保育園」は2名であるが、実際に参加した人数はこれよりもかなり多かった。アンケートの回答が自由だったため、年齢が低い児童については、父兄が回答を遠慮したのではないかと思われる。なお「社会人」のほとんどは子供連れの父兄である。

男女比から言えば、「男」22.6%、「女」77.4%で、実施日が土曜日であったことを考慮したとしても、このような活動に対する関心度は女性の方が圧倒的に高いと言える。

Q 2. 読み聞かせに来てみて、どうでしたか。

	男	女	計
1 とてもたのしかった	3	19	22
2 まあまあたのしかった	2	1	3
3 どちらでもない	2	3	5
4 あまりたのしくなかった	0	0	0
5 ぜんぜんたのしくなかった	0	0	0

(無回答1)

「1 とてもたのしかった」「2 まあまあたのしかった」をあわせると83.3%にのぼる。本交流会は概ね好評であったといえる。

Q 3. このイベントに来よう（参加しよう）と思ったのは、どうしてですか。

（複数解答可）

	男	女	計
1 外国の文化に興味があったから	4	8	12
2 読み聞かせに興味があったから	3	9	12
3 なんとなくおもしろそうだったから	1	3	4
4 友達にさそわれたから	2	1	3
5 たまたま時間があったから	2	1	3

「1 外国の文化に興味があったから」「2 読み聞かせに興味があったから」がともに12ポイントと高かった。

また、男女による際立った違いは見られなかった。

この他、「6 その他」においては以下の回答が得られた。（カッコ内の数字は回答数を表す。）

- ①子供が梶谷先生に習っているから。（4）
- ②先生に誘われたから。（2）
- ③自分が出演するから。（2）

Q 4. 今後もこのようなイベントがあったら、来てみたい（参加したい）ですか。

	男	女	計
1 ぜひ来てみたい	4	17	21
2 来てみたい	3	5	8
3 どちらでもない	0	1	1
4 あまり来たくない	0	0	0
5 来たくない	0	1	1
6 わからない	0	0	0

「1 ぜひ来てみたい」「2 来てみたい」をあわせると29ポイント、93.5%にのぼり、次回開催を強く期待する様子が窺える。

Q5. 今回のイベントについて、どのようなことでもかまいませんので、ご意見をお書きください。

回答数は27であった。以下、主だったものを列挙する。(なお()内の数字は回答数を表す。)

(1) 異文化交流に関するもの(7)

本交流会の感想として最も多かったのは、外国人や外国の文化に触れたことに対するものであった。年少者においては、異文化に触れたことへの新鮮な感動を率直に述べたものが多く(①、②)、社会人においては異文化交流の意義について述べたものが多かった(③)。

①えいごや日本ごのうたがあつたり、かんこくごや、ちゅうごくごのおべんきょうができてとってもうれしかったです！またここでよみきかせがあるときは、きたいです(小学 女)

②外国の人と触れ合うことができよかつたと思う。小さい子には楽しく英語の勉強や発表ができたと思うのでよかつた。(中学 男)

③小さい頃から外国の文化に触れる事は非常に良いことであると思う。特に別府は国際観光温泉文化都市として東京に次いで日本第2位の滞在する外国人の多い都市であることから、子供の頃から外国の人との触れ合いは、将来、国際人となるべき教育にもつながる。(社会人 男)

(2) 交流会全体に関するもの(7)

児童・生徒および社会人とも肯定的意見が大半であった。

①とても楽しくて、今日のことは、ずっと思い出に残ると思います。(小学 女)

②とてもたのしかったです。今日のことはぜったいにたいせつにしていきたいです。(小学 女)

③すばらしい取り組みだと思います。(社会人 男)

(3) プログラムに対するもの (3)

年少者を配慮して歌と踊りのコーナーを設けたこと、また、交流会の途中でお菓子を配ることで気分転換を図ったことは好評だったようだ。特に、入園前後の子供を持つ父兄にとっては、子供を飽きさせない配慮があるかどうか、交流会の参加不参加に大きく影響するようである。

①体を動かすことがあったのも小さい子にはたいくつなくてとてもよかったです。(社会人 女)

②「あたま、かた…」の歌、体を動かしての発音あそびはすごく楽しそうでした。歌って踊ってがもっとちょこちょこ入っていると小さい家の子の様なタイプには良いみたいです。おやつタイムもよかったです。

(社会人 女)

(4) 留学生に対するもの (3)

留学生に対する労いや励ましの意見がいくつも見られた。単に紙芝居を発表するだけでなく、「雨ニモマケズ」において交流会準備の様子を参加者に提示したことも、留学生に対する親近感がうまれた一因なのかも知れない。

①留学生の方々、大変お疲れ様でした。一生懸命な姿にパワーを頂きました。

(社会人 女)

②3月にこられた留学生が半分ぐらいいると聞いて驚きました。とても上手に話して下さいました。日本の国を好きになってもらって、もっともっと日本語、上手になってください。異国の地での生活かけながら、応援しています。(社会人 女)

(5) 提案・要望(4)

今回のアンケートでは、4つの提案・要望があった。以下、各提案について逐次検討する。

①もっと留学生をよんでみんなで見せたほうがいいとおもう。(大学 男)

確かに今回の交流会では、外国人の一般参加は1名と極めて少なかった。また、今回の主な広報は、インターネット、大学事務局・留学生寮等でのチラシの設置、メールによる勧誘であった。

もともと留学生は週末にアルバイトを入れる傾向が強く、予想通りの結果ではあった。しかしながら、地域社会に貢献する留学生の姿を示すことは、日本人だけでなく他の外国人や留学生にも好影響を与えることが期待でき、今後検討すべき課題といえる。

②各国の文化の発表をみたいなと思いました。(社会人 女)

外国の昔話に外国人の語りを通して触れるということも異文化に触れる一つの機会ではあるが、見る側からすれば、それだけでは多少物足りなかったのかも知れない。

例えば、外国の習慣や生活をテーマにしたクイズなどをプログラムに織り込むなど、参加者が国際理解を実感できるプレゼンの工夫が必要だろう。

③ヨーロッパなど、いろいろな国の人がいたらいいなと思いました。(中学 女)

本交流会の発表に参加した留学生は韓国人1名、中国人9名と、かなり中国に偏っていた。

今後は一般参加を募るなど、本交流会の門戸をさらに広げることで様々な国籍の外国人が参加できる配慮が必要である。

④もっと、実際に外国の方と話しがしたかった。(高校 女)

留学生と直接コミュニケーションしたいというニーズは、児童・生徒の年齢が上がるにつれて高まってくるようである。

今回は、発表会ということで日本人と留学生との直接的な交流の機会は特に設けなかった。この点については、例えばお菓子タイムの時に気軽に交流ができるよう簡単なゲームを用意するなど、幅広いニーズに対応できるプログラム作りをさらに検討する必要があると思われる。

4. 考察

以上アンケート結果を振り返ってみると、概ね参加者のニーズに応えられた交流会だったといえる。本交流会は筆者にとって初めての試みであったが、このような交流会自体、別府市内では他にあまり例を見ないものであった。また、中国・韓国といったあまり馴染みのない昔話に触れたことも、参加者にとっては新鮮に感じられ好意的に受け取られたのかもしれない。

ただし、昔話の読み聞かせだけでは、文化情報の提供にはなり得ても、参加者が期待するような異文化交流という点については物足りなさが残る。紙芝居を柱としながらも、様々な形で各国の特色を紹介する魅力的なプログラム作りが必要である。

ところで、これまで多くの教育機関から報告されている、留学生を活用した日本人児童向けの国際理解に関する活動報告は、小学校中学年以上を対象としたものが大半である。また、その目的も日本文化と比較しながら外国の文化に対する理解を深めることで国際的な視野を広げるとというのが一般的で、一定の成果もあげているようである。

一方、入園前後から小学低学年といった比較的低年齢の児童・生徒を対象としている本活動において、先のような文化比較からの異文化理解を期待するのは難しい。実際、交流会に参加した児童・生徒の様子を見てみても、異文化に接しているというより、お兄さんお姉さんと一緒に楽しい遊びの時間を過ごしたという感覚のほうが大きいようだ。

しかしながら、このような交流会を通して異文化接触の機会を提供することで、外国人や異文化に抵抗なく接する素地を育成することはできると思われる。多くの日本人が異文化接触に対してある種の抵抗感を持っていることを考えれば、低年齢児からそのような素地を育ておく教育的効果は大きい。

有田（2005）は、「異文化とのものの見方の対立に耐える姿勢の獲得、自文化中心主義からの脱却、「西欧崇拜、アジア蔑視」の不合理性への気付き、という変容を、できるだけ多くの日本人市民が経験する」（p.195）よう促すことが、地域の「国際化」に果たすべき大学の役割としている。であるならば、そのような固定観念や偏見が形成される以前の低年齢児に対して、異文化接触の機会を提供するということは、そもそもそのような偏った世界観を形成させにくい環境を提供するという意味で意義があるのではないかと考える。

5. 今後の課題

最後に、今後の課題として以下の3点について掲げておきたい。

まず一つ目は、アンケート実施方法つまり回答率をいかにあげるかである。今回の回答数34、参加者の詳細な数字は把握できていないものの約半数の回答しかえられていない。本交流会を留学生と日本人にとってさらに互恵的なものしていくためにもより多くの声を収集する必要がある。

二つ目は、参加者のニーズにより満足に応えられるプログラム作りである。この点については、先の考察で述べたことに加え、参加する児童・生徒の年齢の違いによるニーズの違いにも配慮する必要がある。傾向として、比較的年齢の低い児童は紙芝居・ゲームである程度満足するが、年齢が上がるにつれて留学生との直接交流を望むようになる。昔話の読み聞かせのような一方

向的な活動だけでなく、活発な双方向コミュニケーションを促す活動も盛り込む工夫が必要である。

三つ目は、人的ネットワークの構築である。具体的には留学生の紙芝居作成をサポートする日本人学生、そしてより多様な国籍を持つ留学生の確保である。前者については、本学学生に拘らず広く一般日本人に求める方法もあるが、本活動の趣旨に鑑みれば本学学生が望ましい。また、後者については、講座受講生ではどうしても限界があるため、受講生以外でも参加できるような仕組みづくりが必要である。

以上の点を踏まえながら、留学生と地域社会との交流を進めつつ互恵的な関係の構築に向けて、今後も活動を進めていきたいと思う。

謝辞

本活動の実施にあたり、協力していただいた梶谷先生（MEC主宰）に深く感謝いたします。

注

- (1) 研究生・科目等履修生・別科日本語課程は除く。
- (2) 日本語能力試験1級合格者や入学時に行われるプレイスメントテストで成績が優秀だった留学生等は対象外とされる。
- (3) 以下のサイトを参照のこと。
日本語教師篠崎大司研究室
<http://www.kanjifumi.jp/jouhoushigen-top.html>
- (4) 詳細は篠崎（2006）を参照のこと。

参考文献

- 有田佳代子（2005）「地域の「国際化」と大学の貢献－留学生交流を中心として－」『敬和学園大学研究紀要』14 pp.181-197
- 大村昌枝（2004）「地域社会での留学生交流－宮城のトリロジー－」『留学交流』vol.16 pp.14-17

- 加賀美常美代 (2001) 「留学生と日本人学生のための異文化間交流の教育的介入の意義」『三重大学留学生センター紀要』第3号 pp.41-53
- 神崎道太郎 (2006) 「留学生と地域との交流における現状と将来の課題」『留学交流』vol.18 no.6 pp.10-13
- 倉地暁美 (1998) 『多文化共生の教育』劉草書房
- 篠崎大司 (2006) 「文化情報資源としての留生活用の可能性－留学生による自作紙芝居読み聞かせ活動を通して－」留学生教育学会『留学生教育』第11号
- 鈴木佑司 (2005) 「地域社会での留学生交流－意義と課題」『留学交流』vol.17 no.6 pp.2-5
- 高橋亜紀子 (2004) 「留学生を活用した国際理解教育の在り方－留学生教育の立場から－」『宮城教育大学紀要』第39号 pp.15-25
- 坪井 健 (1999) 「留学生と日本人学生の交流教育」『異文化間教育』No.13 pp.60-74 アカデミア出版会
- 中山謙二 (2004) 「地域社会における留学生交流の在り方」『留学交流』vol.16 no.10 pp.2-5
- 花見楨子 (2006) 「地域交流における留学生支援と国際化」『留学交流』vol.18 no.6 pp.2-5
- 横田雅弘他 (2004) 『留学生アドバイジング』ナカニシア出版

資料

「Mutsuko's English Club と留学生による読み聞かせコラボレーション」

アンケート

別府大学文学部国文学科

篠崎 大司

この度は、「Mutsuko's English Club と留学生による読み聞かせコラボレーション」
にご参加いただき、まことにありがとうございました。

お手数ですがアンケートにお答えください。アンケートの結果は、今後の活動の参
考にさせていただきたいと思えます。よろしく願います。

Q 1. なんさいですか。また、あてはまるものに○を書^かいてください。なまえはいり
ません。

_____ さい : 幼稚園・保育園 小学 中学 高校 大学 社会人 :
(男 ・ 女)

Q 2. 読み聞かせ^きに来てみて、どうでしたか。

- | | |
|----------------|---------------|
| 1 とてもたのしかった | 2 まあまあたのしかった |
| 3 どちらでもない | 4 あまりたのしくなかった |
| 5 ぜんぜんたのしくなかった | |

Q 3. このイベント^こに来よう (参加^{さんか}しよう) と思^{おも}ったのは、どうしてですか。

(あてはまるものは、いくつでも○を書^かいていいです。)

- | | |
|--|---|
| 1 外国 ^{がいこく} の文化 ^{ぶんか} に興味 ^{きょうみ} があったから | 2 読み聞かせ ^{よきき} に興味 ^{きょうみ} があったから |
| 3 なんとなくおもしろそうだったから | 4 友達 ^{ともだち} にさそわれたから |
| 5 たまたま時間 ^{じかん} があ ^あ ったから | |
| 6 その他 (_____) | |

Q 4. 今後もこのようなイベントがあったら、来てみたい（参加したい）ですか。

- | | | |
|------------|---------|-----------|
| 1 ぜひ来てみたい | 2 来てみたい | 3 どちらでもない |
| 4 あまり来たくない | 5 来たくない | 6 わからない |

Q 5. 今回のイベントについて、どのようなことでもかまいませんので、ご意見をお書きください。

ご回答、ありがとうございました。